

ぶっきょうつうしん がつごう かいぶつ
 仏教通信2月号 『怪物とは』

ここ数年、書店で「サイコパス」という言葉をタイトルにした本をよく見かけます。かつては猟奇的な殺人犯を指す言葉でしたが、今では「話に通じない同僚」や「常識に通じない隣人」など、身近な人を表す言葉として溢れています。自分と考える違う人を「サイコパス」という型に当てはめて切り離すことで、私たちは安心してしようとしているのかもしれませんが。相手を「理性に通じない怪物」と決めつける心理は、向き合うことを放棄し、自分は正しいと思い込むための心のバリアのようにも見えます。

また、特定の相手を「異物」として切り捨てる心のあり方は、一歩間違えれば、人間性を喪失した憎しみの連鎖へとつながります。仏教に伝わるアングリマーラの物語は、その恐ろしさを私たちに教えてくれます。聡明な青年だった彼は、間違った教えを信じ込まされ「千人の指を切り取って首飾りを作る」という狂気にとらわれてしまいました。ついに最後の一人を殺そうとしたその時、彼は前を歩くお釈迦さまの姿を見つけます。殺意に燃えて襲いかかってきた彼に、お釈迦さまは静かに「アングリマーラよ、私はすでに止まっている。止まっていないのは、お前の方だ」と言いました。それは、命あるものを傷つけるのをやめ、穏やかな心で生きるお釈迦さまと、残酷な行いに走り続け、自分が暴走していることさえ気づけずにいる怪物のことをあらわしており、この静かな言葉によって、彼の歪んだ闇の心は正しい道へと向かい始めたのでした。

このアングリマーラの悲劇は、二千五百年という長い年月が流れた今の世界でも、形を変えて繰り返されています。ウクライナやイスラエルで続く戦争、そして日々ニュースで流れる残酷な事件。その根底にあるのは、相手を「一人の大切な人間」として見ようとしないことなのです。戦争という極限状態では、相手にも自分と同じように家族がいて、痛みを感じる心があることを忘れてしまいます。相手を「敵」や「標的」といった単なる言葉や数字に置き換え、まるでモノのように扱ってしまうのです。その瞬間に私たちの心から優しさは消え、アングリマーラが迷い込んだ底知れない暗闇に飲み込まれていくのです。私たちはよく、自分は「まとも」だと信じて、理解できない人を「怪物」として遠ざけてしまいます。しかし、本当に怖いのは、自分の中にも相手をモノのように扱ってしまう「怪物」が潜んでいることに無自覚であることではないでしょうか。相手を冷たく拒絶するそのまなざしの中にこそ、怪物の種が潜んでいるのかもしれませんが。自分の心にある身勝手さや残酷な一面を見つめることをやめた時、人は誰でも本当の「怪物」に変わってしまう危うさを持っています。

私たちは、自分一人の力で生きているわけではありません。数えきれないほどの命のつながりや、自分とは考える違う人たちとの不思議な「縁」の中で、奇跡のように「生かされている」のが「私」なのです。その事実気づく時、他者は排除すべき敵ではなく、共にこの世界を生きる尊い命へと変わります。自分の中にある怪物を認め、どんな命も自分の命と同じように大切にすること。そして、生かされていることに深く感謝して合掌するのがお釈迦さまの教えです。合掌



怒りと驕りを捨て、修羅の道を超越した阿修羅王